

聖書箇所

6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。

導入

今日は嬉しい洗礼式の日です。第2礼拝において洗礼式が行われます。本当に喜ばしい日であると思います。この喜びをともに分かち合いましょう。

私は洗礼式を覚えるときに思い出す1枚の絵があります。今から20数年前、高校の美術の教科書に載っていた1枚の絵なのですが、題名がとても印象的でした。この絵なのですが、(スライド)正直、どのような絵だったのかは詳しく覚えてはいませんでした。作者もうろ覚えて、どんな思想が込められた絵なのか、どんな意味を持っているのかなど、絵心のない私はまったくわかりませんでした。だいたい時間がたってから調べたことなのですが、この絵の作者はポール・ゴーギャンで、10代の頃にカトリックの神学校に通っていた作者が、後の人生において、最も絶望している時に描かれたと言われています。そんなことも知らなかった私がなぜこの絵を覚えていたのかというと、題名がとても印象深かったからなのです。この絵の題名は『**我々はどこからきたのか、我々は何者か、我々はどこに行くのか**』と言います。

思春期という多感な時期を過ごしていた私には、この題名が自分に語りかけてくるように感じたのです。あなたはどこからきたの？あなたは何者なの？あなたはこれからどんな人になっていくの？そう聞こえてくるようでした。そして、私はその質問に対する明確な答えを持ち合わせることができていなかったのです。僕は何者だったのだろう、僕は何者なんだろう、僕はこれからどのように歩いていくんだろうか。そう考えると漠然とした不安がよぎっていったのを覚えています。

この質問への私の答えはみことばにありました。僕は何者だったのか。僕は罪人だった。僕は何者なのか。罪赦され神の子とされた者だ。僕はこれからどのように歩いていくんだろうか。神様により頼みながら歩むことができるんだ。これが私に聖書が与えてくれた答えだったのです。ですが、どうも私はこの答えを忘れがちになってしまいます。だから、日々の生活の中で悩み、怒り、不平不満を口にし、葛藤し、涙を流したりするんですね。

そんな私にとって洗礼式は喜びの時であると同時に、この答えを思い起こし、確信させる時となるのです。『我々はどこからきたのか、我々は何者か、我々はどこに行くのか』という質問から、神の子とされ、神様と共に

歩む者に変えられたという答えを今一度確認することができるのです。

イエス様の十字架を自分のものとして告白する洗礼式の時、みなさんはどんなことを思うでしょうか。今日は1コリントのみことばから、神様の子とされたことについて共に考えていきましょう。

本文1:何のために(1~4節)

6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。

ここで、私とは使徒パウロのことを指します。アポロとは使徒パウロと親しい関係にあり、コリント教会の指導者であったと考えられます。パウロはこの手紙をコリント教会に向けて送っているのですが、彼はここで自分とアポロ、そして神様を農作業をする人に例えて語っています。農作物を育てる上で一番大事なことはなんでしょうか。種を蒔かなければ苗は生えてきません。生えてきた苗に水を注がなければ育つことができません。種を植えることも、水を注ぐこともすべて農作物を育てるために行うことです。つまり、農作物を育てる上で一番大切なことは、成長させるということなのです。その成長を担っているのが神様であるということです。つまりこのみことばは人の働きよりも、何よりも大切なのは神様の御業であることを強調していると言えます。人ではなく、神様に焦点を当てているんですね。

3度の宣教旅行をし、各地で福音を宣べ伝え、教会を建て上げた使徒パウロ。コリントの教会は2回目宣教旅行の時に建て上げられた教会です。その時にパウロは1年半という長い時間をコリントの教会の人々と過ごしています。コリントの教会はたて上げられた時から、使徒パウロによって神様のみことばをじっくり学んだ教会と言える訳です。

そんな教会に使徒パウロは神様を見上げなさいということを強調しています。1コリントを読みますと、人ではなく神を見上げることを強調し、教える表現をいたるところで見ることができます。成長させたのは神です、と。なぜ彼はこのことを強調しているのか、その理由はコリントの教会の現状にありました。**1コリント3:1~4**

1 兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語ることができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。

2 私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。

3 あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。

4 ある人は「私はパウロにつく」と言い、別の人は「私はアポロに」と言っているのであれば、あなたがたは、ただの人ではありませんか。

コリントの教会がどのような教会であったのか。パウロはここで、キリストにある幼子のような教会、肉の人で

あるといいます。当時のコリント教会は、神様の御心を求め、教会の中で愛を持って仕え合うことよりも、誰がよりよい賜物をもっているのか、誰がより高い地位にいるのかということにこだわっていました。その結果、自分の賜物を見せびらかし、兄弟姉妹を蔑み、教会内で争いが生まれていました。神の家族としての平安はなく、常に葛藤と混乱が起っていたのです。教会内部の分裂もありました。パウロに着くのか。アポロに着くのか。この考えの違いにより、同じ教会なのに、共に礼拝することすら難しい状況にあったのです。

コリントという街はとても栄えていて、豊かな街であったといいます。旅の中継地点としてあらゆる文化や物資が集まる港町だったのです。そして、あらゆる不道徳も蔓延っていました。偶像礼拝も盛んで、偶像が強い力を持っていました。そんな地に教会を建て上げ、信仰生活を続けるには大変な苦労があったことでしょう。宣教を妨げ、福音を拒む人たちがたくさんいたことでしょう。それでもみことばを伝えるためには、教会が一つの心になることが何よりも求められたはずですが、しかし、コリントの教会はそうあることができなかったのです。なぜコリントという地に教会が建て上げられているのか。なぜ自分達は神の名の下に集まっているのかを忘れていたのです。コリントの教会は神様を知らない人と何ら変わらない、肉の人となってしまうしていました。だからこそパウロは繰り返し、繰り返し語るのです。ただの人ではなく、神様を見上げる人となりなさい、と。成長させたのは神であることを忘れてはならないと。神の子となっていることの意味を知りなさい、と。

幼子は成長しながら生きていくための大切なことを学びます。何度も転びながらしっかりと歩く術と、筋力を手に入れます。何度も発声しながら言葉を覚えます。何度もしかられながら他の人と共に生きる知識を学びます。キリストにある幼子が学ばなくてはいけない大切なこと。それは、成長させたのは神であるということを知ることなのです。

教会があるのは何のためでしょう。礼拝を捧げるのは何のためでしょう。教会の奉仕は何のためにあるのでしょうか。聖書の学びは何のためにあるのでしょうか。教会の働きは何のためにあるのでしょうか。教会の事業は何のためにあるのでしょうか。献金を献げるのは何のためでしょう。賛美は何で歌うのでしょうか。私たちは何のために教会に集まるのでしょうか。

神様を信じているからです。神様を信じているからなんです。

神様が罪人であった私たちを憐れんでくださった。一人子イエス・キリストを送ってくださった。私の罪の贖いのためにイエス様が十字架で血を流してくださった。だから私は神様の子どもとなれた。私の人生の歩みを神様と共に歩むことができるようになったのだ。この事実を信じるからこそ私たちは教会に集まり、礼拝し、祈り、讃美し、奉仕し、教会の働きをしているのです。

私たちは神様とともに歩むことを望む者です。神様の子とされた者です。そんな私たちは神様を見上げようではありませんか。神様のために教会に集おうではありませんか。成長させたのは神であることを覚えましょう。神様の栄光をあらわす、神の子として歩いていこうではありませんか。

本文2:主により頼む姿勢、成長させたのは神(5~7節)

5 アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であって、主がそれぞれに与えられたとおりのことをしたのです。

6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。

7 ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。

人は、ただ神様のみわざを成し遂げるための奉仕者であるといえます。キリスト教の歴史の中で偉業を成し遂げたとされているパウロでさえ、神様のみわざのための奉仕者、働き人でしかないというのです。

6節には3つの動詞が登場します。植えて、注ぎ、成長させた、です。植えて、と注ぎ、は過去形ですが、成長させたという動詞は過去のある時点で起こったことがその後ずっと続けて行われていることをあらわす文法が用いられています。パウロの植えるという動作も、アポロの水を注ぐ動作も過去に行い、終わったことです。しかし、成長させてくださる神様はその後もずっと、ずっと導き守り育ててくださるというのです。

コリント教会の問題は、人の働きを見て起こったものでした。誰が偉いのか、誰の働きがすごいのか。そこに焦点を当てていたのです。1コリントの手紙はパウロがコリントの教会を離れてから5年くらい経ってから送られたものであると言われています。その間たくさんの指導者が立てられたことでしょう。その内に人を見るようになってしまいました。そして、神様よりも働きに重きを置くようになっていったのです。

神様は人の手を用いてみわざを成し遂げられる方です。この事実は神様の御心を求める者にとって、大きな慰めとなります。人の力には限界があります。いくら努力し、自分のすべてを出し切ったとしても、望み通りの結果を得ることができるとは限りません。しかし、神様が担ってくださるなら、神様が続けて成長させてくださるなら、何も心配することはありません。私たちに与えられた使命を全うすることができるなら、神様が結果を担ってくださるからです。伝道者3:9~15

9 働く者は労苦して何の益を得るだろうか。

10 私は、神が人の子らに従事するようにと与えられた仕事を見た。

11 神のなさることは、すべて時にならって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない。

12 私は知った。人は生きている間に喜び楽しむほか、何も良いことがないのを。

13 また、人がみな食べたり飲んだりして、すべての労苦の中に幸せを見出すことも、神の賜物であることを。

14 私は、神がなさることはすべて、永遠に変わらないことを知った。それに何かをつけ加えることも、それから何かを取り去ることもできない。人が神の御前で恐れるようになるため、神はそのようにされたのだ。

15 今あることは、すでにあったこと。

これからあることも、すでにあったこと。

追い求められてきたことを

神はなおも求められる。

私たちは時に神様に失望することがあります。どんな時かという、こんなことが起こっていいはずはないのに起こってしまった時と、こうならなければいけないのに、そうならなかった時です。悪いことが裁かれない時と正しいことが行われぬ時と言い換えることができるでしょうか。要するに何でですか!と神様に問いただしたくなる時です。

私たちの教会では毎年3月に教会総会がもたれています。その総会に合わせて総会資料を作成しているのですが、総会資料ではスタッフ報告を始め、教会の1年間の働きを報告しています。毎年ご覧になっている方も多いことでしょう。今年の3月にもやはり教会総会があり、総会資料も作成されました。私はいつもスタッフ報告と TEENS 礼拝企画奉仕部、TEENS の子どもたちと行う受洗準備クラスの報告を担当しています。しかし、2022年度の総会資料には受洗準備クラスの報告を記すことができませんでした。2021年に TEENS の受洗準備クラスが行われなかったからです。

この事実は私の心をとても重くしました。神様に申し訳ないという思いが起きました。自分の未熟さを何度も、何度も嘆きました。祈っていると、自分の情けなさに涙したこともありました。

頭ではわかっているんです。自分の力ではどうしようもないことなのだ。自分を納得させる言葉もたくさん浮かんできました。しょうがないよ、と。それでもそのことを思うとどうしようもなく心が沈んでいくのをとめることができませんでした。もっとできたことがあったのではなかったのかと後悔もしました。やがて神様に問いただすんですね。何でですか、と。そんな思いを心のどこかでずっと持っていました。

先週救いの証集が発行されました。皆様の家庭にも1冊ずつ配布されたと思います。私も手にとってじっくりと読む時間を持ちました。涙が流れましたね。そこには神様が一人一人を特別に取り扱ってくださっていることが証されていました。そして、一人の人が救われるために、たくさんの人が関わっていること、神様が用いてくださっていることが証されていたのです。教会へと導いてくださった方がいました。共に礼拝をささげる仲間がいました。その方を覚えて祈る方がいました。その方とともに聖書を学ぶ方がいました。何よりも教会全体がその方を救いへと導くように用いられていました。種を蒔き、水を注ぐ働きがあり、成長させて下さる神様が証されていたのです。

私はいつのまにか、自分が種を蒔き、私が水を注ぎ、私が育てなければいけないことに気付かされました。神様により頼むことを忘れ、自分の働きにだけ目を向け、勝手に失望していたんですね。神様のみわざを求めるのではなく、自分の働きの結果を求めています。神様の時を求めているのではなく、自分の時を求めています。

神様のなさることはすべて時にかなって美しいものです。しかし、人はその神様のみわざを見極めることができません。だからこそ躓くことが多くあります。しかし、この事実は同時に私たちを神様により頼むものへと変えてくれます。神様が担ってくださることを信じる時、すべてを神様に委ねることができるんです。神様は人の手を持って種を蒔かれ、人の手を持って苗に水を注いでくださるからです。そしてその苗を神様が成長させてく

ださるのです。だから私たちは神様を見上げましょう。人を見るのではなく、働きを見るのではなく、私たちに良いものを与え、賜物を与え、働きを与えてくださる神様だけを見上げましょう。神様により頼んでいきましょう。

結論:成長させてくださるのは神

私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。私たちはこの言葉を覚えたいと願います。このみことばとともに歩みたいと思います。神様を見上げ、神様により頼み歩いていきましょう。